



高速横浜環状北線建設に伴う
発掘調査

ぼ ぼ わたうちやといせき 馬場綿内谷遺跡

(横浜市鶴見区No.87 遺跡)

古墳時代の集落跡

ぼ ぼ わたうちやといせき
馬場綿内谷遺跡の発掘調査

横浜市鶴見区馬場七丁目に所在する馬場綿内谷遺跡では、首都高速道路株式会社と横浜市が計画する高速横浜環状北線の建設に伴う埋蔵文化財の記録保存を目的として発掘調査を実施しています。

遺跡からは、平成23年度からの調査によって、江戸時代の道の跡、平安時代のお墓、古墳時代の集落跡、縄文時代の集落跡などが発見されており、たくさんの遺物が出土しています。

今回は、平成24年度に調査している古墳時代集落跡（およそ1300年前）の成果を中心に紹介します。



遺跡 位置図

これまでの主な発見遺構と出土遺物 ——発見遺構——

- 中・近世: 道跡、溝、段切り、建物跡など
- 古代(奈良・平安時代): 火葬墓、土坑など
- 古墳時代: 竪穴住居跡、
- 縄文時代: 竪穴住居跡、集石土坑など
- 旧石器時代: 石器の集中

——出土遺物——

- 中・近世: 陶磁器・寛永通宝 など
- 古代(奈良・平安時代): 土師器、須恵器、蔵骨器 など
- 古墳時代: 土師器
- 縄文時代: 縄文土器、打製石斧、磨製石斧、垂飾、石皿、石鏃など
- 旧石器時代: 剥片(黒曜石)など

発見された遺構 (平成23年度)

平成23年度の調査

馬場綿内谷遺跡における平成23年度の調査は、馬の背状になった丘陵の尾根筋から北側斜面、南側に広がった緩斜面、南側斜面下の谷の一部について実施しました。

丘陵の尾根にはほぼ東西にのびる幅3メートルの江戸時代の道跡(300年前)が発見されています(写真①)。

丘陵南側に広がる緩斜面には遺構の分布が希薄でしたが、平安時代の火葬墓(1100年前)が4基発見されました(写真②)。この時代の住居跡は発見されておらず、火葬墓は集落から離れた場所につくられたことがわかります。

丘陵尾根から北側斜面にかけては、縄文時代前期(6000年前)の竪穴住居跡(写真③)や集石、縄文時代前期から中期(5000年前)にかけての土器・石器が発見されています。集石とは石を熱して調理をするための施設です。竪穴住居とともにこうした施設が集落を構成していたことがわかります。

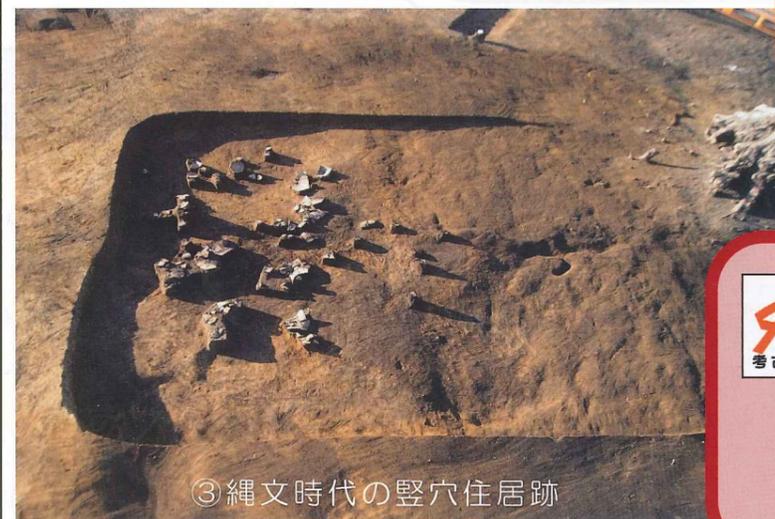
丘陵南側の小さな谷からは古墳時代後期(1300年前)の竪穴住居跡が発見され、谷に古墳時代の集落があったことが判明しました。



①江戸時代の道



②平安時代の火葬墓



③縄文時代の竪穴住居跡



高速横浜環状北線建設に伴う発掘調査

馬場綿内谷遺跡(横浜市鶴見区No.87 遺跡)

2012年7月

公益財団法人かながわ考古学財団

〒232-0033 横浜市南区中村町3-191-1

TEL 045-252-8689 <http://www.kaf.or.jp/>

およその年代

3500年前

1500年前

2500年前

1700年前

1300年前

800年前

400年前

150年前

旧石器時代

縄文時代

弥生時代

古墳時代

古代

中世

近世

馬場綿内谷遺跡航空写真(南から)

古墳時代の集落（平成 24 年度調査）



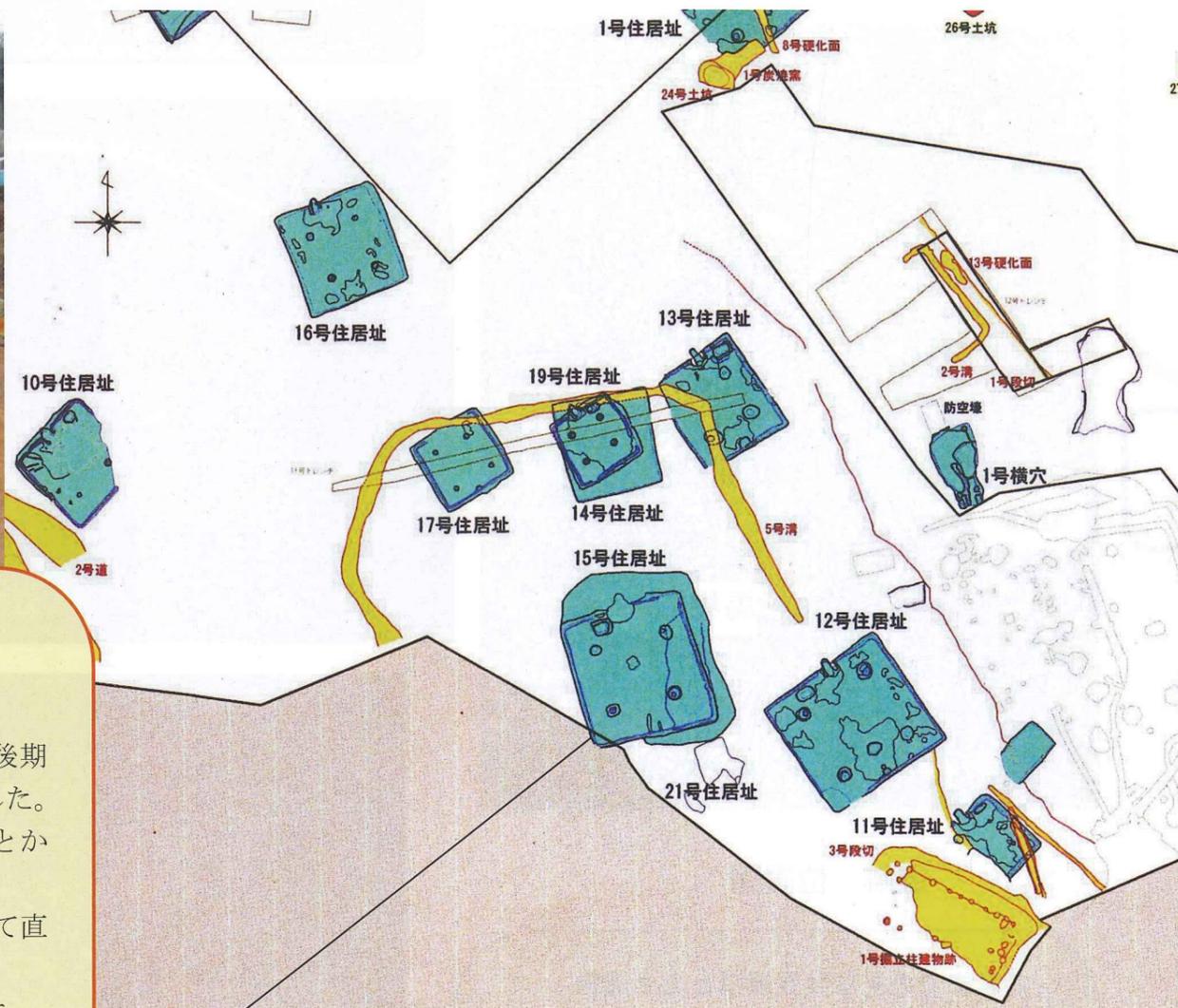
④古墳時代の集落跡（西から）

古墳時代の^{たてあなじゆうきよあと} 堅穴住居跡と^{しゅうらく} 集落

平成 24 年度に調査した丘陵南側にある小さな谷からは、古墳時代後期（今から 1300 年前）の堅穴住居跡 12 軒・横穴墓が 2 基発見されました。堅穴住居は谷底を埋める様に分布し、谷の外側では発見されないことから、この小さな谷の内側に集落をつくっていたものと思われます。

発見された住居は同時に建っていたものではなく、何度か住居が建て直された結果、12 軒の住居跡が残されたのでしょう。

こうした集落の跡は当時の社会を考える上で重要な資料となります。



平成 24 年度の調査区（青が古墳時代・黄色は江戸時代）



⑥堅穴住居のカマド（10号住居跡）



⑦堅穴住居のカマド（11号住居跡）

15 号住居跡（古墳時代後期）

深さ 1.6 メートルもある^{たてあなじゆうきよあと} 堅穴住居跡

15 号住居跡⑤は 1 辺が 6.6 メートル、深さが 1.6 メートルもあります。写真に写っている人の身長と比べると、その深さがよくわかります。

多くの堅穴住居では堅穴の上の部分が削られて失われていることが多いのですが、谷底に堆積した土砂により本来の姿に近い状態が失われることなく発見されました。

このように深い住居跡の調査は非常に珍しいものです。



⑤15号住居跡（南から）

たてあなじゆうきよ 堅穴住居とカマド

古墳時代後期（今から 1300～1400 年前）になると堅穴住居の中にカマドが作られるようになります（写真⑤⑥⑦）。

カマドとは火を燃やす場所の周囲を粘土の壁で囲い、その上に煮炊きの為の土器をかけられるようにしたものです。

それまで住居の中で火を燃やし煮炊きをするのは床で直接火を燃やす「炉」でした。

火を燃やす場所の周囲を粘土の壁で囲むことにより、炉にくらべ熱が逃げなくなって火を燃やす効率が良くなりました。

またカマドを壁ぎわに作ることによって、住居の外側に煙を出すことが可能になりました。

カマドの導入によって当時の住環境はおおいに改善したのです。